

## 第12章

# オセアニアと日本が出会うとき： 小笠原・八丈島のアウトリガー漁船



## オセアニアと日本が会うとき：小笠原・八丈島のアウトリガー漁船

### はじめに

第2部の最後に日本列島にもオセアニアから直接伝わったアウトリガーカヌーの伝統が存在することを見てみたい。それは小笠原諸島で漁業や運搬に使われていた舟と、そこからさらに八丈島に伝わり日本の漁船や漁法と融合した事例である。オセアニアの伝統が日本で民俗化した現象として興味ある事例である。

### 1. 小笠原諸島

東京から黒潮本流を越えて約千キロ南下したところに浮かぶ小笠原諸島は北端の聳島列島、次に中心地の父島のある父島列島、さらに南にもう一つの拠点・母島列島、そして最南端に硫黄島を含む火山列島の総称である（図12-1）。小笠原諸島は海洋島に分類される。海洋島とは大陸移動や氷河期における海面低下にさいしても、一度も大陸とつながったことのない島のことである。

小笠原諸島は歴史上では大航海時代にスペイン人などが見いだしていた可能性がある（大熊1985）。一方、日本では小笠原貞頼という人物が16世紀に発見したという伝説がある。小笠原氏は徳川家康の家臣で貞頼は家康の命令で探検をしたと言われるのだが、実在の人物かどうか怪しいと言われている。しかし幕末から明治初頭にかけて日本が領有宣言する過程で伝説の「小笠原」が採用されたのである。

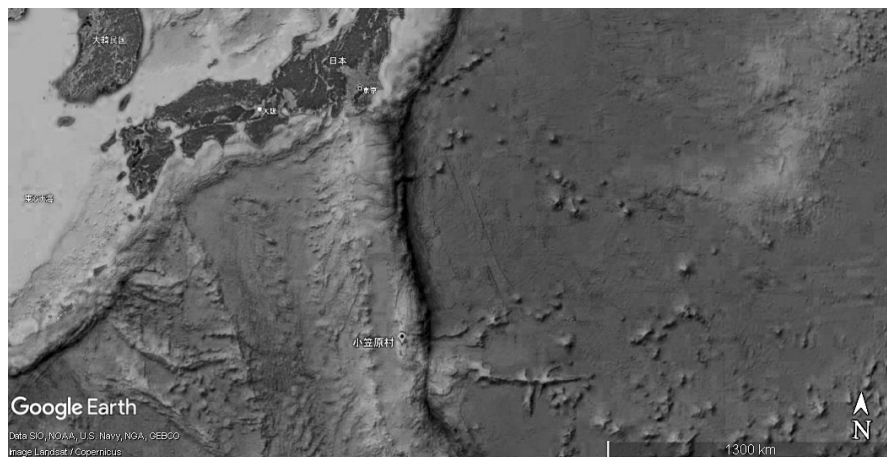


図12-1 小笠原諸島の位置

### 2. 八丈島・小笠原の考古学的位置づけ

採集品のため年代は得られていないが、小笠原諸島の南端に近い北硫黄島からは円筒形石斧が発見されている。この石斧は先端の刃部がやや凹んでいて、横から見ると非対称形で、斧というより正確には手斧であり、丸太を削り貫くような作業に使用されたものと思われる。類似の資料は父島

でも見つかっているが、周辺でこの種の石器が分布するのは北の日本列島ではなくむしろ南の北マリアナである。グアム島やサイパン島のラッテ期（今から3000～2000年ほど前）から類似の石器がたくさん発見されている。さらにシャコ貝製の斧、子安貝製の錘、また系統や時代は特定できないが石組みの儀礼用と思われる構造物などが発見され、全体としてマイクロネシアあるいはフィリピン方面と関係を示唆する資料が優勢である。おそらく今から2000年ほど前の先史時代、小笠原や伊豆七島南部にはオーストロネシア（南島）語系統の文化が到来し、かつてはマイクロネシアの一部だったと言うべきだろう（小田 1999）。

しかしその後、小笠原は千年以上無人島の時代が続いた。英語の名称ボーンアイランズは「<sup>ぶにん</sup>無人」の音をまねたものとも言われる。

### 3. 人類の再居住

小笠原にはその後難破した捕鯨船の乗組員などが避難して住んでいた形跡がある。江戸時代には日本の漁師も何度か漂流している。小笠原はこのようにして無人の島から再び有人の島、ただしロビンソン・クルーソーの島となっていた。

そして今に続く歴史は1830年にハワイから西欧人とハワイアンやその他のポリネシア人の移民約25名ほどが移り住んだときから始まる。当時ハワイはカメハメハ3世の治める王国であった（後藤 2008）。1839（天保十）年、陸前高田（岩手県）の中吉丸が遭難して翌年の1月父島についた。このとき乗組員は1カ月ほど滞在して帰国した。住民たちは言葉が通じなかったが親切で、女性はムウムウの着用、挨拶は片手を上げて「アロウハ」だったと報告している。また乗組員は、口はマウス、鼻はノウシなど英語由来と思われる語彙も聞き取っていた。

ハワイからの移住者が持ち込んだ文化要素の一つがアウトリガーカヌーである（図12-2）。

黒船を率いて日本に開国を迫ったアメリカのペリー提督も1853年小笠原に寄って絵図や記録を残している。幕府は文久元年（1861）年に外国船の到来や江戸の南方に「外人」が住み着いたことにショックを受け、咸臨丸を派遣して初めて小笠原を認知し領有宣言をした。このときハワイから来た住民との通訳をしたのがジョン万次郎である。そのときの模様が『八丈実記』に「御奉行ヨリ



図12-2 父島ビジターセンターの帆走カヌー



図12-3 『八丈実記』に描かれたカヌー絵（第2巻）

御尋ヲセイボレ御答佐之通り」と書かれている。つまり探検隊長で外国奉行の水野筑後守に住民代表のナサニエル・セボレーが答えたとあるのだ。このセボレーこそ最初の移民のリーダー格の人物で、その子孫は今日まで続く小笠原の名門一家である。

近藤富蔵の記した『八丈実記』によると、このとき幕府の探検隊は住民が使っていたカヌーを3隻買い上げたと言われる：

クノフ舟三艘買上

金一二両 一艘 長九尺 巾一尺五寸

金一五両 一艘 長二間 巾一尺五寸

金二〇両 一艘 長二間半 巾一尺八寸

また停泊中に「異人三人乗来る」として簡単な絵が添えてある（図12-3）。

#### 4. ハワイ直輸入小笠原式カヌー

さて文久元年探検隊が残したかなり詳しい絵図が残されている（図12-4）。それには住民がハワイから導入したアウトリガーカヌーが描かれている。ハワイ式のアウトリガー式カヌーやパドルの特徴は表12-1（章末）にまとめてある。

『文化財の保護14号：特集 小笠原諸島文化財調査報告』（1982）には次のように記載されている。

本来は太平洋諸島で用いられた物で、在来島民が導入したと考えられ、現在では八丈島まで及んでいる。本当でも現在は八丈島の型、すなわち、へさきとともが別形をもち、舳先に向かって左側に腕木を出した物が一般的であるが、これは改良型であって、本来の型は前後同型のクリブネであった。材としてはアコウが多く、一部にハスノハギリを用いたクリブネであって、良材が少なくなってからはぎ合わせて作るようになった。腕木にはモンテンボクが使われ、船具としてシャリンバイで作ったブチボウを準備する。捕った鮫その他の大魚をこれで撲殺するのである。本土と同じくオモテ、トモの名が用いられ、表面の乗る部分にふたをする区画をカッパという。龍の形・目玉などの象形は用いられていない。

（小笠原村教育委員会 1982: 25-26）

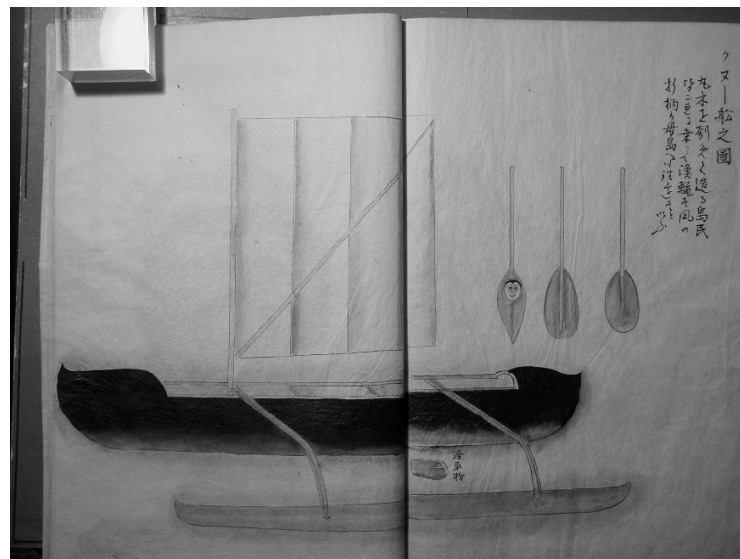


図12-4 文久元年の絵図（東京都公文書館）

さて小笠原で記録されている最古のカヌーにおいても、帆はすでに西欧のスプリット型セイルの影響を受けた四角帆であり、ハワイに典型的な逆三角形の帆ではすでにない（図12-5）。しかし浮き木の構造や一緒に描かれているパドルあるいはアカカキは明らかにハワイないしオセアニア式である。

1 本人面が描かれたパドルがある。目の大きな漫画的な人物が描かれている。オセアニアのカヌー用パドルに装飾が施されるのは珍しくない。しかしたいていは抽象的な文様が彫られるのが普通である。強いて具象的なものを探すと鰐などの図柄がないわけではないが、正面からみた人面のような図柄の例はあまり見ない。この種のパドルはメラネシア、ソロモン諸島北部のブーゲンビル島のものにもっとも近いのではと思われた（図12-6）。この島のカヌーパドルには丸い大きな黒目をもった人物像が描かれるのが特徴である。

さらに描かれた仮面の図柄がある（図12-7）。カヌーの舳先などに魔除けなどの目的でつけられるものと注釈がある。具象的な人面などを舳先につけるのはハワイやポリネシアではあまり聞かず、メラネシアのソロモン諸島などに限られる。ただ小笠原の絵図に似ているのはソロモン諸島よりも、その北西にあるビスマルク諸島、とくにニューアイルランド諸島の著名な原始芸術「マランガン」様式である（図12-8）。たとえば図12-7の仮面を見ると、頭と顔の比率、髪の毛の状態などが酷似している。また大きな牙を出した人面も特徴のひとつである。またあまり似ていないが、や

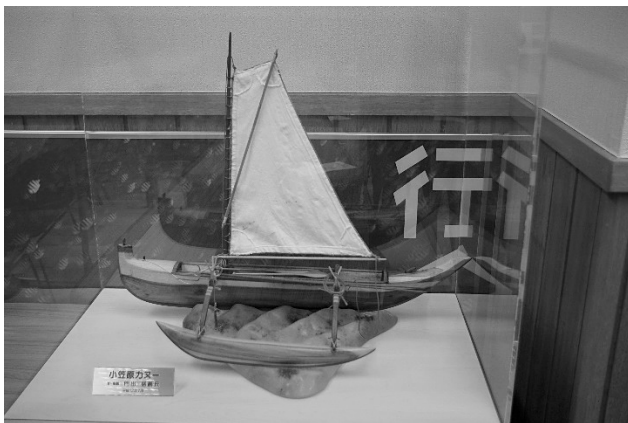


図12-5 父島ビジターセンターの帆走カヌー型



図12-6 メラネシア・ブーゲンビル島の装飾パドル（ハワイ・ビショップ博物館）



図12-7 文久元年絵図。カヌーの魔除けとして装着したものか（東京都公文書館）

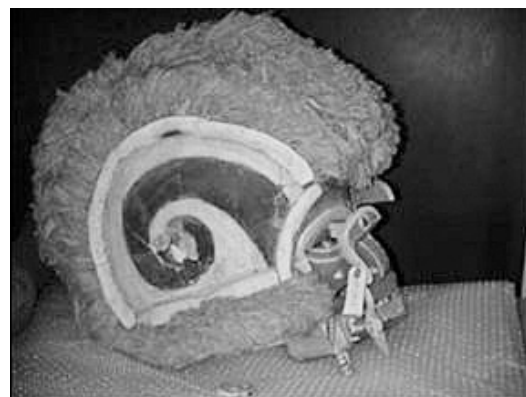


図12-8 メラネシア・ニューアイルランド島のマランガン様式仮面（南山大学人類学博物館蔵）

はりマランガン様式には巨大な牙をだした像が顕著である。

メラネシアのソロモンやビスマルク諸島を想起させる装飾パドルや仮面、これは何を意味するのか？ 小笠原に移住したのはハワイからの移民であってメラネシアの人々ではない。しかし最初の移民はハワイ先住民だけではなく当時ハワイに住んでいたオセアニアの他の人々もいたらしい。もう一つの可能性は小笠原にはハワイからの移民の前後、世界各地から来たビーチコマーが移り住んでいたことである。そのような人々の中にいた西欧人がメラネシア付近から土産物として持ち込んだパドルや仮面があったのかもしれない。

## 5. 和洋折衷式カヌーの誕生

さて小笠原のカヌーは当初はハワイ・ポリネシア式に丸木を彫って作られていた。タマナ（テリハボク *Calophyllum inophyllum*）などが最適であったといわれる。しかしカヌーが生活に根がすに從って、次第に改良が加えられていった。たとえば船体は本州からもってきた杉材に変わっていった（図12-9）。作り方も丸木式の船底の上に、舷側板を加えるような接合型に変わっていった。板の接合には和船の技術が随所に取り入れられていった（図12-10）。

その他の特徴であるが、ハワイ式のアウトリガーを反映して、腕木と浮き木の接合は「直接結縛」式であった。しかしやがて改良が加えられ、浮き木自体が、丸木舟式の底部に蓋を重ね、全体が舟のような形になるように構造化されていった。また腕木も大きく湾曲させるために2つの部材を結合する形となった。ただし腕木が浮き木に刺し込まれる方式は維持された。

小笠原には八丈島から開拓民が到来し、中には船大工もいた。彼らもカヌーの改良に一役買っている。アウトリガーを持ったカヌーの使い手に感心した八丈島民は逆に八丈島にカヌーを導入したと聞く。現在まで八丈島で使われるカヌー型漁船である。むかしカヌーを造っていたという船大工に八丈島で聞き取りをした。それによると戦前軍役で小笠原に行ったおり、カヌーを見て作り方を覚え、戦後小型漁船として八丈島で作ったのだという。ただし1930年代に八丈島で撮影されたと思われる写真にアウトリガー・カヌーが写っているので、小笠原から八丈島への伝播は戦前に遡るようである。また青ヶ島でもカヌー漁船が写っている写真がある（東京都島嶼町村会発行『写真集『黒潮に生きる：伊豆諸島』、1981、参照』）。

カノウ式漁船は小規模な漁や趣味の船として小笠原、八丈島両地域で今日まで残っている。ただし船体は今日ではほとんどファイバーグラスである。小笠原では船体断面が縦長で元形を保っている（図12-11）。一方八丈島では普通の漁船のように横長、左舷にアウトリガーを装着するために

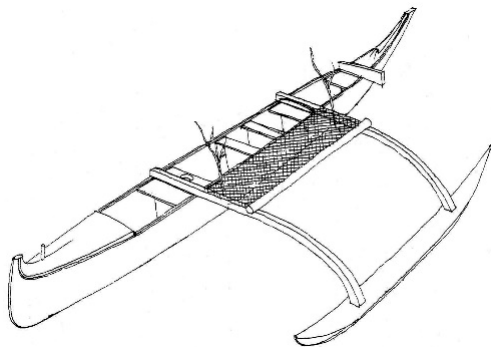


図12-9 現存する杉材製のカヌー計測図  
(小笠原村教育委員会)  
船体の長さ7.3m、幅0.41m、深さ0.53m



図12-10 戦後一時期千葉県で作られていた小笠原式カヌー（浅沼精太郎氏提供）



図12-11 現在使用されているファイバーグラス製の船外機用カヌー（父島にて）  
船尾に帆を張るためのロープを縛る突起の残存が残る。モデルは浅沼精太郎  
氏が戦後千葉で作って「輸出」した図12-10のようなカヌー



a



b

図12-12 八丈島の「カノウ」漁船 a: 八重根港、b: 八丈島郷土資料館

非対象形の船体になる傾向はある（図12-12）。八丈島の八重根港で使われていた漁船は船体がかなり非対称形となっているが、郷土博物館に野外展示されている「古い」とされる漁船は船体がかより細身である。小笠原型から八丈島型への変化途上の姿を示すのではないかと推測される。

また小笠原と八丈島のカヌーの最大の違いは、前者がハワイ・オセアニア式のようにパドルで漕ぐが、後者は櫓で漕ぐ点である。八丈島での聞き取りでは、八丈島は波が荒いので船体を頑丈に高く造ったため座ってパドルで漕ぐのは無理で、立って櫓で漕ぐためなのだという（図12-13）。ハワイ・ポリネシア式カヌーが櫓で推進するに至ったのである。

一方、戦後アメリカ領となった小笠原には旧島民の中で西欧人の血の入った人だけが島に残るのを許された。日本人はみな本土に疎開させられたのであった。カヌー大工浅沼精太郎さんもその一人である。現在千葉県に住む浅沼さんは母島から疎開したカヌー大工のお父さんを手伝って市川市でカヌーを造り続けた。当時小笠原に住んでいた西欧人系の住人やアメリカ軍の軍人たちの間に需要があったためである。カヌーをまとめて造って当時アメリカ領だった小笠原に「輸出」したのであった（図12-10）。

浅沼精太郎氏の年始状と思われる「米軍政下帰島民生活状況について」という教育委員会の資料には次のように記載されている。

漁労にあっては本土からカヌーを購入する者も多くなり（主に千葉が多い）帆走していたが、後にも船外機も普及取り付けたので時間的にも肉体的にも余裕が出来た。

……カヌーの船外機取り付けには苦心したといわれ、ほぼ現在のようなになったのは最近のこ

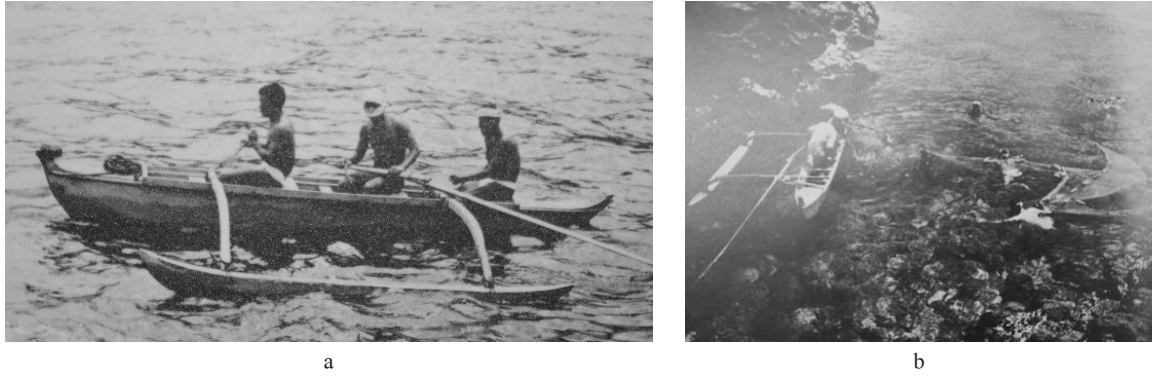


図12-13 櫓で推進する八丈島のカノウ (a: 八丈島郷土博物館、b: 写真集『黒潮に生きる：伊豆諸島』、1981、p. 248。東京都島嶼町村会発行)

とといわれる…… 帆走は特技とする者が多く、母島から1時間30分位で帰ったものもいるといわれる。  
(小笠原村教育委員会 1982: 48)

このように本州や八丈島との交流の中で小笠原・八丈のカヌーは変遷してきた。小笠原のカヌーはサワラや亀を突く漁に主に使われる。そのとき使用される漁具は日本式である。たとえばサワラ鉾は房総半島付近のツキンボだし、亀鉾は伊豆七島形式のものである。そのほか海底に潜るときに使用するメガネはおそらく沖縄・糸満の人たちが伝えたものである。

つまり小笠原のカヌーはハワイ、西欧と日本の伝統が出会ったことでできあがった独特の船なのである。1830年代、すでに西洋式の影響を受けたハワイ型カヌーが小笠原に持ち込まれ、その後小笠原や八丈島の人たちが改良したのが今日のカヌー漁船の来歴である。小笠原と八丈島のアウトリガー型漁船には、日本内外の海民の活躍が体現されているものである。



表12-1 ハワイ式カヌーの特徴

<p>I. Hull form (船体の形態)</p> <p>a. both ends low</p> <p>b. <u>both ends upturned and pointed, height variable</u></p> <p>c. head low, stern elevated</p> <p>d. ends equal, upcurved, forked or with figure head</p> <p>II. Hulls with inserted transverse frames (船体に挿入された肋材)</p> <p>a. functional</p> <p>1. with ribs sewn directly to skin</p> <p>2. ribs lashed to comb cleats or to ridges on inner side of skin</p> <p>b. <u>degenerate or vestigial</u></p> <p>c. as solid bulkheads</p> <p>III. Forms of outrigger attachment (アウトリガー装置の形状)</p> <p>a. direct attachment of booms to float</p> <p>1. <u>booms curved, with lashed attachment</u></p> <p>2. booms elbowed, with inserted attachment</p> <p>b. indirect attachment</p> <p>c. mixed attachment</p> <p>d. number of booms</p> <p>1. <u>two booms</u></p> <p>2. multiple booms</p> <p>IV. Form of Paddle Blade (パドルの形状)</p> <p>a. <u>board and short; cordate, ovate, obovate, or elliptical</u></p> <p>b. lanceolate</p> <p>c. intermediate; strongly shouldered</p> <p>V. Modification of Blade Tip (パドル尖端の突起形状)</p> <p>a. tip swollen</p> <p>b. <u>tip ribbed</u></p> <p>c. tip beaked</p> <p>* 下線の特徴がハワイ式カヌーに適用される。</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(Haddon and Hornell 1936: 442 より改変)